

仏典の漢訳とチベット語訳をめぐって

斎藤明

人文学という分野において翻訳がもつ意味は大きい。このことは外来の宗教思想、哲学文献、文学作品等を受容する際にかぎらず、古典と呼ばれる多くの文献を近現代の言語に翻訳するケースに目をやりさえすれば、容易に理解されよう。そのなかでも、宗教思想や哲学文献のばあいには、キーワードとなる術語に対する適確な理解がきわめて重い意味をもつ。それらの術語を、文化史や思想史上の背景を考慮しながら、個別の文献に即して、当該の術語が登場する文脈のもとに的確に理解することが、まずは求められる。

その上で、信頼に足る、しかも可能なかぎり語感の冴えた訳語を択びとる必要にせまられる。既存の語彙にふさわしい訳語が見当たらないときには、音写語（菩薩、阿羅漢、三昧、ブツダ、ニルヴァーナ等）を採用したり、新造語（縁起、仏性、精進、衆生等）を当てることにもなる。

本発表では、「バウツダコーシャ（仏教用語の日英基準訳語集および定義的用例集）」と題するプロジェクトが扱った仏教術語を例にとり、専門用語を現代語に翻訳する際の問題に焦点をあてたい。伝統的な漢訳とチベット語訳は、それぞれいかなる苦勞と工夫のすえに翻訳事業をなし遂げたのか。——本発表では、この点に触れたうえで、仏教術語の現代語への翻訳を行う際の課題と展望を、普遍的な心作用の1つとして知られる *manaskāra*（〔和訳例〕〔心の〕傾注，〔英訳例〕*attention*；〔玄奘訳〕作意，〔チベット語訳〕*yid la byed pa*, etc.）等の具体例を挙げながら考えてみたい。